

研究主題 「これからの社会を生きぬく力を培う新しい学級活動の在り方 －児童の不安解消に視点を当てた学級活動の指導の工夫－

東京都教職員研修センター研究部研究課
中央区立日本橋小学校 教諭 宮内 有加

I 研究のねらい

これからの社会を生きぬく子どもたちには、よりよい社会を築くために「共に生きる力」が求められている。この力は、特別活動、とりわけ学級活動(1)を通して身に付けさせたい力である。学級活動(1)は、よりよい学級を目指して学級の諸問題を見付け、集団で問題解決を行う時間である。その中で、提案力や発想力等の個人的資質（目的に向かって活動を続ける力）を身に付けることや、友達の意見を受け入れながらよりよい解決方法を考える等の社会的資質（人とつながる力）を育てることを目的としている。また、個人的資質と社会的資質の両面をバランスよく育てることが求められている。

しかし、学級活動(1)の現状は、児童が学級の諸問題に気付けない、自分の考えをもてない、自分の考えを発表できない等個人的資質が十分に育っていない面や、自己主張ばかりして友達の意見を受け入れることができない、友達と協力して物事に取り組むことができない等よりよい人間関係を築くための社会的資質が十分に育っていない面が見受けられる。

これらの問題の背景には、自分の意見に自信をもてないことや友達とかかわることに対する「不安」が関係していると考えた。その原因として、これまで学級活動(1)の指導では、児童の自主的な活動を促すことに重点がおかれ、活動の中で児童が抱く様々な「不安」を解消するための手だてを具体的に講じてこなかったことがあげられる。さらに、児童の様々な「不安」を解消しないまま活動を継続させたため、いつしか「不安」が「不満」に変わり、児童がより積極的に友達とかかわろうとする意欲を低下させたのではないかと考えた。

そこで、本研究では、上記のように主題を設定し、これからの社会を生きぬく力を培うために、学級活動の中で発言できないことへの不安解消に視点を当てたカリキュラム開発を行うことにした。研究を進めるにあたり、以下のように研究仮説を設定した。

【研究仮説】

学級活動での「問題解決思考過程に関する不安」と「人とかかわりに関する不安」の両面から、「不安」を解消するための手だてを講じることにより、共によりよい学級を創ろうとする児童が育つ。

II 研究の内容・方法

1 基礎研究

(1) 現代の子どもたちが抱える「不安」についての文献研究

小学生の15.4%は悩み事を相談できる友達がいない。友達との関係については、「友達と話が合わないと不安に感じる」「仲間はズレにされないように話を合わせる」など友達関係の緊張感を表す項目で小学生の割合が高い。(ベネッセ「子ども生活実態基本調査」(2004年11月～12月実施 対象小学4年生～高校2年生 合計14841名)より)

子どもたちを取り巻く社会が変化する中で、子どもたちは、親子関係、友達関係において高い不安と孤独感の中におかれ、人の中にいると疲れる子ども、集団の中にいることそのものが楽しめない子どもが増えてきている。(『学級再生』小林正幸著より)

2 調査研究 (調査対象：都内公立小学校5・6年児童 804名 調査時期：平成17年10月)

学級活動(1)に関する「活動意欲」、「指導の工夫」、「不安要因」、「育てる力」、「不安尺度」についての意識調査を実施し調査結果を分析したところ、以下のような結果を得ることができた。

(1) 「学級活動(1)の不安要因」

発言できないことへの不安要因に関する調査項目を因子分析した結果、4因子が抽出され、

表 1 のように分類した。 【表 1 学級活動(1)の不安要因の分類】

問題解決思考過程に関する不安	不安	人とのかかわりに関する不安
<p>< 因子 1 > 発想・伝達不安 相手にわかりやすく説明できるか不安になる。 友達の意見がよく理解できず、不安になる。 自分の考えが思い浮かばず不安になる。</p>		<p>< 因子 3 > 受容不安 友達と違う意見でも自信をもって発言できる。 発言することであまり目立ちたくない。 間違った意見を言ったらはずかしい。 友達と違う意見を発言することで、友達との関係をこわしたくない。 自分の意見はクラスみんなに受け入れてもらえる。 友達の意見につられてしまうことがある。</p>
<p>< 因子 2 > 効力不安 発言しても他の意見と一緒にまとめられてしまう。 話し合っている議題がつまらない。 限られた友達の意見に決まってしまう。</p>		<p>< 因子 4 > 承認不安 友達に認めてもらえる発言をしたい。 先生に認めてもらえる発言をしたい。</p>

また、これらの4因子と、「STAI状態不安検査」に基づいて作成した「学級活動(1)不安尺度」との関連を調べるため、Pearsonの積率相関係数を算出したところ、有意な相関が見られたため、学級活動(1)における不安要因として捉えることにした。

(2) 「学級活動(1)で育てる力」と「学級活動(1)の不安要因」との関係

「学級活動(1)で育てる力」に関する項目を因子分析した結果、「個人的資質」と「社会的資質」の2因子が抽出された。また、「学級活動(1)の不安要因」4因子をそれぞれ従属変数とし、「学級活動(1)で育てる力」2因子を説明変数とした重回帰分析を行ったところ、「個人的資質」が高いほど「受容不安」や「発想・伝達不安」が低く、「社会的資質」が高いほど「承認不安」や「効力不安」が低いことが分かった。

(3) 「学級活動(1)の指導の工夫」と「学級活動(1)の不安要因」との関係について

「学級活動(1)の指導の工夫」に関する調査項目を因子分析した結果、3因子が抽出された。また、「学級活動(1)の不安要因」4因子をそれぞれ従属変数とし、「学級活動(1)の指導の工夫」3因子を説明変数とした重回帰分析を行ったところ、表2のような結果となった。なお、分析はステップワイズ法により行い、変数として当てはまりの悪かったものは除外された。

【表2 「学級活動(1)の指導の工夫」と「学級活動(1)の不安要因」との重回帰分析の結果】

学級活動(1)の指導の工夫	受容不安	発想・伝達不安	承認不安	効力不安
共感的な理解に支えられた居場所がある	除外	0.180**	-0.147**	-0.268**
自分の意見やよさを認められた経験がある	-0.383**	-0.100*	-0.108*	除外
自分の考えをもつための工夫がある	-0.109**	除外	-0.254**	除外

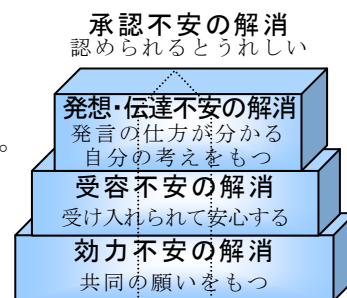
(有意水準 **; p < 0.01 *; p < 0.05)

このことから、共感的な理解に支えられた居場所があると「効力不安」が低くなること、自分の意見やよさを認められた経験があると、「受容不安」が低くなること、自分の考えをもつための工夫があると「承認不安」が低くなることが分かった。

【図1 発言できない不安解消の3段階】

3 実践研究

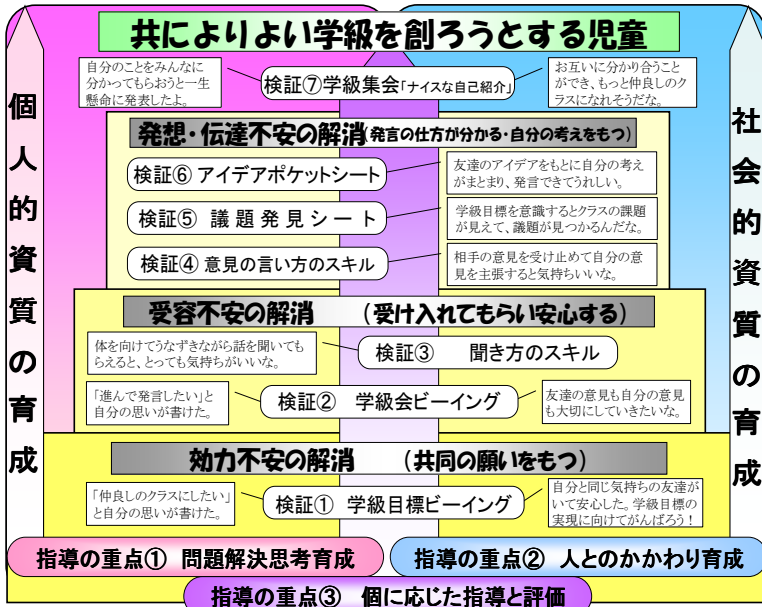
調査研究の分析結果により、表2の3つの指導の工夫が発言することが苦手な児童の不安解消と関係していることが明らかになった。そこで、図1に示したように、4つの不安要因を段階的に解消する必要があると考え、発言できるようにするための指導の重点と具体的な手だてを次のように考えた。



- 指導の重点1 問題解決思考育成 → ・学級目標ビーイング ・学級会ビーイング ・意見の言い方のスキル
 ・議題発見シート ・アイデアポケットシート
- 指導の重点2 人とのかかわり育成 → ・学級目標ビーイング ・学級会ビーイング ・聞き方のスキル
- 指導の重点3 個に応じた指導と評価 → ・個人的資質・社会的資質の評価一覧表 ・振り返りカード ・終末の助言の工夫

そして、これら3つの指導の重点を意図的、計画的に位置付けた「不安解消のための指導計画」を作成(図2)し指導を行うとともに、「個人的資質・社会的資質の評価一覧表」(図3)を活用して評価を行い、発言が苦手な児童の「不安」を解消し、よりよい学級を目指した話し合い活動に積極的に取り組めるようにした。

【図2 不安解消のための指導計画と手だてとの関連】



第一段階 「効力不安」を解消するために、学級目標ビーイングを行い、自分と同じ「不安」や「学級に対する思い」をもつ友達の存在に気付き、安心感をもてるようにした。

第二段階 「受容不安」を解消するために、学級会ビーイングを行い、学級会の課題を共有化させ、学級会のめあてを作った。さらに、自分も相手も心地よい聞き方を身に付けさせるためのスキル学習を行い、受け入れてもらえると感じて安心できることを実感させた。

第三段階 「発想・伝達不安」を解消するために、自分も相手も大切にしたい意見の言い方を身に付けさせるためのスキル学習を行い、発言の仕方の定着を図った。また、議題発見シートを活用して、学級生活改善のための議題に気付かせる工夫をするとともに、ブレンライティングの手法を取り入れたアイデアポケットシートを活用し、自分の考えをもてるようにした。

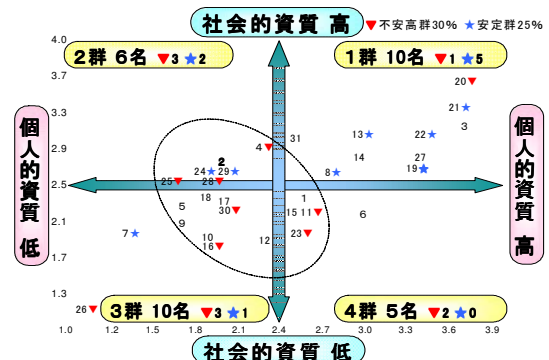
第一段階から第三段階の一連の活動の中で、個に応じた指導を行うために、「個人的資質・社会的資質の評価一覧表」に基づいて、一人一人の児童の資質の把握に努めた。2群の児童には、個人的資質を育てる観点、4群の児童には、社会的資質を育てる観点、3群の児童には、個人的資質・社会的資質のどちらかを育てるかを見極めた上で、指導目標を設定し、特に不安解消につながる変容に着目し、支援することにした。具体的には、児童の思いや気付き、行動に対して、受けとめる、認める、励ます等の言葉がけを行った。(表3 指導の重点③) さらに、不安傾向の高い児童や、個人的資質・社会的資質の向上が必要な3群の児童を中心に、活動の中で見られた個々の小さな変容を見逃さず、意図的に取り上げるようにした。

Ⅲ 研究の結果と考察

1 学級生活改善のための「議題作りの話し合い活動」及び「学級集会」の様子

議題作りの話し合いでは、よりよい学級を目指してお互いのことを知り仲良くなるために「ナイスな自己紹介」の計画を立てることに決まった。また、話し合いでは、アイデアポケットシートに書かれた友達の意見をヒントにして、これまで発言できなかった児童も発言することができ、活発な話し合いとなった。集会活動では、自分のことをみんなに分かってもらうため、各自

【図3 個人的資質・社会的資質の評価一覧表】



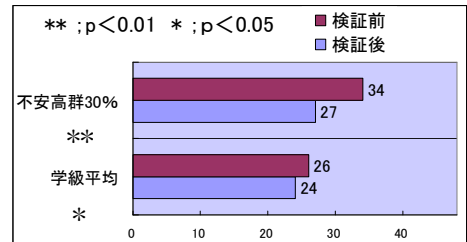
が発表の工夫をすることができた。また、友達の発表をよく聞く姿も見られた。集会後の振り返りでは、「発表は緊張したけれど皆が応援してくれて安心できた」と記述した児童もいた。

2 不安高群の児童の変容

(1) 「不安尺度」の変容

検証授業前に行った「不安尺度」調査で、不安高群 30% (9名) の児童について、検証授業後の「不安尺度」の変容を調べたところ、9名全員の「不安」が軽減した。(図4)

【図4 不安尺度の変容 t 検定結果】 12項目



(2) 不安高群の児童に対する「指導と評価の事例」

【表3 児童A(不安高群 30% 個人的資質の向上が必要な2群)の変容】		
【検証授業前】 自分の考えもっているものの、控えて、意見を発表することの少ない児童である。	→	【検証授業を通した変容】 終末の助言では、毎回、振り返りカードに記述された児童Aのよさを意図的に紹介するようにした。また、カードの記述の中で児童Aの思いを受け止め励ますように助言を積み重ねた。集会の実行委員に立候補し、率先して準備を進め、司会役として活躍した。
指導の重点①②	児童の様子(振り返りカードより一部抜粋)	指導の重点③ 個に応じた指導と評価
学習活動の流れ	検証② 学級会ピーニング 意見が言えればとてもいい気持ちになって楽しくなる。だからこれからは意見を言うようにしようと思えるようになった。	自分の意見が言えたら気持ちよくなるよね。Aさんも勇気を出して自分の意見が言えるといいですね。応援しています。 * 思いを受け止め励ます
	検証④ 意見の言い方のスキル 自分も友達の意見も大切にすることを学びかった。私の一番苦手なところを勉強したのでこのことを身に付けてよりよい学級の時間を送りたい。	ワークシートを見ると、とてもいいことに気付き、よい考え方をしているなどと思います。もっと自分に自信をもっていいと思いますよ。 * 気付きを認め励ます
	検証⑥ アイデアポケットシート 今日は学級会が楽しくできました。手は進んで挙げられなかったけれど考えることはできた。	実行委員に立候補し率先して働くことは素晴らしいです。 * 行動を認める 発言しなくても一生懸命に考えていたのですね。大切なことです。 * 行動を受け止め認める
	検証⑦ 学級集会ナイスな自己紹介 司会を頑張れた。もう少し大きな声を出して司会や発表を言えばよかった。みんなのことを知れてこれからも仲良くしていけるような気がした。	実行委員として大活躍してくれましたね。ありがとう。 * 行動を認める みんなのことを知れてますます仲良しのクラスにしていけそうですね。 * 思いを受け止める

児童Aの他にも、話し合い活動の中で、初めて自分の意見が言えた3群の児童B、実行委員に立候補し最後まで責任をもって自分の役割を遂行した4群の児童Cに著しい変容が見られた。

3 学級全体の変容

検証授業前後に行った調査を比較した結果、学級全体に以下の変容が見られた。

- 検証授業後、不安高群の児童だけでなく、学級全体の「不安尺度」が低くなった。(図4)
- 検証授業後、学級活動で育てる力「個人的資質」「社会的資質」がともに、向上した。(図5)
- 検証授業後、「共感的な理解に支えられた居場所がある」「自分の考えをもつための工夫がある」「自分の意見やよさを認められたことがある」の「指導の工夫」に関する因子項目が高まった。

4 検証授業の考察

「不安解消のための指導計画」は、検証授業後の調査結果により、学級全体の児童の不安解消及び、個人的資質・社会的資質の育成に有効であることが実証された。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- 学級活動(1)に関する調査の作成、調査結果の分析を通して、発言できない不安要因を明らかにできたこと。
- 発言できないことへの不安解消の手だてを意図的・計画的に位置付けた「不安解消のための指導計画」を作成し、「指導と評価の事例」に基づき、その有効性が実証できたこと。

2 今後の課題

低、中、高学年別の学級活動(1)に関する不安解消指導計画・及び指導事例を作成すること。

【図5 育てる力の変容 t 検定結果】

